＜総括質問＞

　初めての決算委員会を経験させていただきました。今回は、なるべく多くのことを質問して、そのご意見を頂きたく、細々と提案させていただきました。ご丁寧に対応いただいたこと、改めて御礼申し上げます。

　いくつかの質問の中で、私が意識していたことは、港区をこれまでどのようなビジョンで運営してきたのか、またこれからどんな未来を見据えているのかということです。税収の落ち込みを覚悟しなければない一方で、社会保障費が増大、また町会など地域を担う組織の力が弱くなっている現状にあっては、全ての施策を実施するわけにはいかず、取捨選択が必要となります。そんな時、大事なのは、区が行う全ての施策に共通するビジョンを明確に示すことです。区長には今後とも強いリーダーシップを発揮していただき、共に歩むべき方向を示していただければと思います。

　その際、大切にしなければならないポイントは二つあると考えます。一つ目は、区として必要最低限度やらなければならないことは、できるだけ効果的・効率的に実行すること。その上で、「自分たちのことは自分たちでやる」地域の助け合いの力を信じて活用すること。もう一つは、環境などの新産業、若者の育成など、将来お金を生み出す分野については「投資」という考えの下に積極的に施策を打つことです。港区がいつまでも日本の、東京の中心として魅力的な街でありつづけることを願ってご提案致します。

地域の助け合いの仕組みづくりについて、まず、これからの街を担う若者を育てることをご提案致します。「社会のために何かしたい」と考える人はたくさんいます。彼らの力を街づくりに活かすために、本決算委員会で私はいくつかの質問を行いました。若者の力を高齢者の見守りに活用する構想、地域の大人が見守るやんちゃし放題の公園＝「プレーパーク」をつくる構想、区内に住むスポーツ選手やアーティストの力を借りて教育を支援する構想などです。加えて、ここでご提案したいのは、町会や商店会の人手不足にそうした需要を組み合わせ、これまで街づくりへの参加が小さかった若者を加えて企業や大学、区民などが自分たちの力で街の課題を解決していく仕組みです。

　区民の社会参加を支援する施設としては「チャレンジコミュニティ大学」があります。これはご存知の通り、お年寄りの方向けのプログラムです。参加者からはポジティブな意見が多く、卒業後の組織である「チャレンジコミュニティクラブ」等を経て、様々な活動を行っている方も大勢いらっしゃいます。こうした取り組みを若者向けにも実施し、関わった地域に愛着を持ってもらうことで、将来、街に貢献できる人材を育てていくべきだと思います。

　仮称「みなと学舎」をご提案します。町会・商店会などに地域の課題をどんどん提供してもらい、それを専門家によってきちんと整理してストックします。その上で、大学のゼミやサークル、若手社会人に呼びかけ、それぞれの専門性を活かして解決してもらうのです。そこで、お伺いします。このような将来の地域を担う若者の力を活かし、街の人手不足を解消する仕組みについてどのようにお考えでしょうか。

　次に、コミュニティスペースについてです。総務費の款で、私はコミュニティスペースの可能性について質問致しました。その際、「区民恊働スペースを活用し、交流の場をつくる」という答弁をいただきました。私は、「恊働」を機能させるためには、その場をコーディネートする「ファシリテーター」の存在がとても大事だと思います。「芝の家」が成功している理由の一つは、そこに大学生や教授が常駐しており、区民のウォンツとニーズをうまく引き出しつつ、助け合いの仕組みを運営していることです。そこでお伺いします。今後、「芝の家」をどう深化させていくのか、その方針をお聞かせください。また、このような取り組みを芝地区だけでなく他地区へ拡大することについて、加えて、今後区民恊働を進める人材としてファシリテーターの育成に取り組む必要性についてご答弁をお願いします。

続いて、未来へ有効な投資をする仕組みづくりについて、初めに到達目標の明確化をご提案致します。長期的な視点で街を良くしていくためには、将来お金を生み出す分野に今のうちから積極的に「投資」しておくことが大事です。その際に必要なのは、計画性です。私は、区として何かをはじめる際、それぞれの施策に短期的・長期的なゴールを設定した上で、可能な限り全てにおいて、それを数値化することが大切だと考えます。参加人数、認知度など、いくつか指標を決めた上で、目標を明確にすること。また評価の際はその到達度と併せて、費用対効果の観点からも検証することを徹底し、「やりっぱなし」にならないようにするべきです。まずはこのことについて、区長の考えをお聞かせください。

　次に、「理想の街」を多様な区民と議論する場づくりについてです。区を今後どのような街にしていくかについて、私は、できるだけ多くの区民に参加してもらい、みんなで決めていく仕組みづくりが必要だと考えます。急増している新住民も含め、幅広い層の街づくりへの参加を得るためには、参加のハードルを下げること、さらに区民それぞれの意見をぶつけやすい環境をつくることが大切です。その際のポイントは二つ。一つは、それが「楽しい雰囲気を醸し出していること」、もう一つは、「誰もが意見を言いやすいテーマであること」です。名付けて、「ミライ会議」。10年後、20年後の港区の未来を、行政も企業もNPOも、みんなが一緒となって考えるワールドカフェ方式の会議体をつくるのはいかがでしょうか。テーマは「自分の理想の街」とし、誰もが知っている港区の有名人の参加もあれば、より参加を得られやすいと思います。タウンフォーラムなどをより発展させる形で、専門家なども交え、こうした取り組みをしたら面白いかと思いますが、いかがでしょうか。ご答弁をお願いします。

　次に、広告媒体の創出についてです。歳入の款では、ちぃばすのバス停の広告媒体化、田町駅東口北地区公共公益施設のネーミングライツなどについて提案させて頂きました。中でも私が最も大切だと思うのは、区が持つ様々な資源の広告媒体化を検討するための、数人の外部専門家による検討委員会の設置です。こちらは、ご検討、何卒宜しくお願い致します。

　本日はそれに加えて、今後多くの需要が予想される公共施設などの建て替えに区民の力を活かす方策についてご提案致します。熊本城や北海道•岩見沢駅の修復プロジェクトは有名です。これは老朽化に悩まされていた観光資源を、「有志」の力で修復しようと、行政が考案したものです。この仕組みのポイントは、修復作業に寄付を通じて市民が気軽に参加出来るという点です。市民は、修復に必要な一つ一つのブロックを寄付によって購入します。ブロックには自らの名前が記され、次の建て替えまでそれが残るというものです。今後、修復予定のある区有施設についても導入してみるのはいかがでしょうか。ご意見をお聞かせください。

　最後に、今後区が一歩進んだ被災地支援を行うことについてです。当初から言われていたことですが、東日本大震災から半年が過ぎ、復興が進む一方、現地でのボランティアなどによる支援の手は、日に日に薄くなっているようです。私が運営しているNPOの支援先の一つである仙台市若林区の農家さん曰く、「何年かかるか分からないが、これから完全に復興するまでの間、何をするにもとにかく人手が足りない状況。冬は冬支度、春は春でボランティアが来てくれると助かる」とのことです。

　私は、こういう時だからこそ、区としても改めて商店街連携などで関係のある福島県いわき市などへの厚いサポートをするべきだと考えます。具体的には、先日、ニ島委員も指摘されていた区民のボランティアを促す復興支援バスの運行、農作物や海産物の販売支援、また現地NPOなどへの支援が考えられます。東京都では、NPOや市民活動センターと連携し、学生や社会人だけでなく、災害ボランティア経験者をコーディネーターとして派遣する取り組みも行っています。大田区の例なども参考にしながら、区独自の具体的な支援策を打つべきかと思いますが、いかがでしょうか。乗り越えるべき様々な課題はあるかと思いますが、支援機関の設置の可能性も含めてお伺いします。

　加えて、私が提案したいのは、心のケアに精通した精神科医やカウンセラーなど専門家の継続的な派遣です。先ほどご紹介した仙台市若林区の農家さんも最近、被災地で殊に増えている自殺者の問題を憂いており、支援組織を立ち上げたそうです。港区を改めて振り返ってみると、ここには医療関係のエキスパートがたくさんいらっしゃいます。必要な措置を講じた上で、彼らや区の専門職員にもご協力いただき、継続的にサポートできればと考えますが、いかがでしょうか。ご答弁をお願いします。